

今年生活産業委員長に

市議会5月臨時議会で役員を選任

5月14～15日に、改選後はじめての臨時議会が開かれました。この議会は議長をはじめとする議会の役職を決めることが中心です。選挙の結果、

議長・大西克美氏

副議長・佐久間浩治氏

監査委員・森しず子氏

が選出されました。



日本共産党鈴鹿市議団の役職 (写真は本会議場をバックに、石田・森川)

石田 秀三 生活産業常任委員長 議会基本条例特別委員
国民健康保険運営協議会委員

森川ヤス工 文教福祉常任委員 地震防災特別委員
鈴鹿亀山広域連合議会議員・監査委員 同和行政委員

また、議会運営委員会には石田が「委員外議員」として参加します。「委員外議員」は、発言はできますが、議決権はありません。

本会議場での議席は、最前列で石田・3番、森川・4番に座ります。会派ごとの議員控室、日本共産党の部屋は13階の東から2番目です。

これから4年間の議会活動、市議団として全力をあげて頑張ります。市民の皆さんのご支援を、よろしくお願いいたします。

鈴鹿医療科学大学の薬学部新設に 9億円の市補助金

6月4日から市議会6月定例会が始まりました。川岸市長は10億円の補正予算案を提案しましたが、そのうち3億円は、旧NTT研修センター（旧電通学園）跡地の建物を鈴鹿医科大が購入・改修して、新設する薬学部の経費への助成金です。市の助成金は3億円を3年間、合計9億円の予定です。

大学側の資料では、本部を含む全体事業費63億8千万円のうち、薬学部分は46億7300万円となっています。この事業費の10%を三重県が、20%を鈴鹿市が助成するというのが、9億円の算定根拠ということです。

市民への説明なく、議会での議論も不十分

今回の補正予算の財源10億円は、すべて財政調整基金＝貯金の取り崩しです。財政計画になかった9億円という大きな出費を認めるには、その必要性や効果、財政見通し、他の施策とのバランスなど、いろいろな面から説明、検討が必要です。改選されたばかりの議員に、最初の議会で早急に賛否を問うには、時間が足りないと思います。市民にしても、選挙の時に話題にもなっていなかったことであり、川岸市長を無条件で信任したわけではありません。市長は議会にも市民にも、十分な説明をする責任があります。

私は11日の一般質問で、この補助金についてただす予定です。

議員の海外視察は見直しの時期

市民から批判の多い議員の海外視察について、鈴鹿市議会は今期も参加することになりました。各派代表者の話し合いのさいに、私はもう参加をやめること、共産党は以前からも、これからは参加しないと意見を述べました。公明党も同様の意見でしたが、他の会派が賛成して決まりました。

海外視察は、日中友好議員連盟が行なう中国行きに毎年2名、県市議会議長会が行なう海外行き（今年はオーストラリア・ニュージーランド）に毎年2名が予算化され、すでにくじ引きでメンバーも4年分決まっています。

先日三重県議会はキッパリと海外視察はやめると決めました。「一人120万円使い切り」への批判に、すばやい対応でしたが、市議会の方は「これまで通り」です。市民の声にもっと敏感になるべきだと思います。

憲法 9 条は世界平和への「国際貢献」

憲法改定のための「国民投票法」が、国会で強行成立され、いよいよ憲法本体を守るのか変えるのか、が国民的大争点となってきました。

事実を語る映画「戦争をしない国・日本」を観る

5月27日、「9条の会すずか」でドキュメンタリー映画「戦争をしない国・日本」が上映されました。戦前・戦中・戦後の歴史をすべて記録映像で編集した、説得力ある内容でした。

特に、憲法の9条「戦争放棄」や25条「基本的人権」などの条文が、アメリカの押し付けではなく、日本の憲法研究会などの活動の成果であったこと、逆に憲法が出来てまだ間もない時期に、アメリカが東西冷戦の中で「日本の再軍備、憲法改定」を押し付けてきたことを証明する米公文書の映像は、「改憲派」こそアメリカの言いなりで動いていることを事実で語っていて、胸がスーッとするほどの内容でした。

芝参院議員も「靖国派」のメンバー

5月27日の日刊「赤旗」記事「ここが知りたい特集・これが靖国派の正体」を見ていたら、5月3日に「新憲法制定促進委員会準備会」が天皇を元首とする「新憲法大綱案」を発表したとありました。この委員会は、自民党の古屋圭司氏を代表に25人の超党派国会議員が参加、うち5人の民主党所属議員の中に「芝博一」の名前がありました。芝氏のホームページを見ても、このような記載はありませんが、「戦後レジームからの脱却」を掲げる安倍首相の応援団「日本会議」の系統のメンバーであることは明らかです。

悪質商法の被害にあわないために

5月30日、鈴峰地区社協の会合で、鈴鹿亀山消費生活センターの中西所長の「悪質商法」撃退の話をききました。2月に地元の方から「いま布団の訪問販売にだまされて判を押ししてしまった」と相談があり、すぐに消費生活センターに連絡して翌日に解約となりました。「おかしい」と思ったら、すぐにセンターに相談しましょう。電話は375 - 7611です。

ずいそう

「わが人生の歌がたり」

このごろのテレビは、見ようと思う番組がほんとに少なくなってきた。いちばんのゴールデンタイムに、なんであんな下らないバカ騒ぎのような放送をしているのか。見ている人には悪いが、有害無益である。

そこで最近、私がひいきにしているのが、NHK「ラジオ深夜便」である。この番組は、熟年者を対象にしたものだが、全国にたくさんのファンを持ち「静かなブーム」になっている。といっても、私は夜中はもっぱら寝ているので、主に月刊「ラジオ深夜便」誌上で再現された番組を味わっているのだが。ゆったりとした流れ、定年前後のベテランアナウンサーの「正しい日本語」、そしてなつかしい思い出の音楽と、登場するゲストのしみじみとした語りなど、熟年のリスナーにはこの上ない「癒やし」である。

作家・五木寛之とともに「昭和」を回想する

月に1回、日曜の朝4時から五木寛之が「わが人生の歌語り」と題して、自分が生まれた昭和7年から戦中戦後を生きてきた道筋を、その時々々の流行歌とともに回想するコーナーがある。その第1回から18回までをまとめたものが第1巻として3月に角川書店から出版された。(全3巻の予定)いわば「流行歌でつづる五木寛之の自伝」である。

五木氏が物心ついて最初に記憶に残っている歌は「アリラン」で、生後間もなく両親とともに植民地だった朝鮮に渡ったのである。軍国主義の下、小中学校に通い、そして敗戦、混乱の中で母を亡くし、苦労を重ねて福岡に引き揚げ、昭和27年上京して早大に入学したところまでが、第1巻である。

悲惨な毎日の生活の中でも、歌は五木青年の心の支えとなった。食うのに必死だった貧乏学生を励ましたのは、美空ひばりの歌声だったという。

月刊誌連載の第23回では、大学を中退して仕事を転々としていた昭和34年のころを五木氏は、「歌の文句が身にしみる時代でした。」「歌謡曲というものはそういう日陰の部分ですとすくいとすくいと取ってくれる、私たちの仲間なんです。」と語っている。

だれにも人生の節目ごとに流れていた歌、励まされたり癒やされた歌がある。カネやモノでは満たされない何か、きっと歌にはあるのだろう。